御霊が招いておられる　　**黙示録 3 章 14～22 節**

黙示録の７つの教会について学んでいますが今日は最後のラオディキアの教会に宛てられたメッセージを見てゆきます。先週のフィラデルフィアの教会には称賛の声が上がっていましたが今日のラオディキアの教会には対照的に欠点の指摘と叱責がかけられています。今日の箇所を通して神様は何を私たちに教えておられるのでしょうか？　２つのことを見てゆきたいと思います。それは１）神はあなたをずっと呼んでおられるということ　２）その呼びかけにあなたは答える必要があるということです。

１）神はあなたをずっと呼んでおられます。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたいている。」(20 節）とあります。「わたし」とは、イエス・キリストのことです。立ってたたいているというのはずっとたたき続けているという意味です。過去から現代、そしてこれからもたたき続けられるということです。画家のハントがこの場面を描きました。ここに出てくるのはイエス・キリストです。主イエスが外から扉をたたいておられます。この「戸」とは教会の扉のことです。キリストは、なぜ、戸の外におられるのでしょうか。キリストは教会の内側におられるはずではないのでしょうか。キリストが教会の外に立っておられるのは、ラオディキアの教会が、悲しいことに、イエス・キリストを締め出していたからです。つまり教会の中心におられるべきお方が、教会の隅っこどころか、外にまで追い出され、教会であがめられるべきお方が、軽んじられていたということです。それでいて、ラオディキアの人々は、「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っている」(17 節）と言って、自分のみじめさ、哀れさ、貧しさに気がついていませんでした。当時、ラオディキアは交通の要の都市で銀行の中心地であり、毛織物の生産と目薬の輸出で経済的に有名な都市でした。その経済力や、紀元６０年頃に巨大な地震があって多くの町が被災し崩壊したと言われています。しかしその時に復興できたのはラオディキアとヒエラポリスの２つの町だけだったと言われます。さらにローマ帝国からの支援を受けないで自力で復興したのはこのラオディキアだけでした。ですからこの町はあらゆることに恵まれ豊かなのです。しかしラオディキアの教会はその経済的豊かさのために信仰が「生ぬるく」なってしまい、その不信仰のゆえに「生ぬるいので、あなたを口から吐き出す」(１６節）と言われているのです。イエスは、ラオディキアの人々が本当の意味で豊かになるために、３つのもの（火で精練された金、身につける白い衣、目に塗る薬）を買うように勧めます。しかし実はこれは痛烈な皮肉です。ラオディキアの町は、金を扱う銀行と毛織物と目薬で有名な町でした。この３つの産業で栄えている町なのに、あえてそれを買え、とイエスは言われたのです。その真意は、それらのものは買おうと思ったら簡単に手にすることは出来るだろうがそれらはあなたの信仰の成長には何の効果もないということが分かっていますか？ということでした。確かに、彼らは、この世の富は持っていました。しかし、信仰の富は持っていませんでした。教会に大勢人があふれていたかもしれません。しかし、その中に主を愛する人がほとんどいなかったのです。そこには、立派な集会場所があり、整った「礼拝式」はあったことでしょう。しかし、悔い改めて自らをささげる真心からの「礼拝」がなかったのです。それが彼らの現状です。ちなみにラオディキアという町の名の意味は「国民の義」です。それは同じ意味で言い換えるなら「人間中心主義」ということです。産業が盛んであったと言ってもやはり人間が勤勉であったからこそ栄えたと思います。しかし、それがいつのまにか神様に頼らなくても自分たちが頑張ればやってゆけると思うようになったのです。

しかし、主は、そんな教会に対しても、なお、その戸をたたいてくださっています。「わたしは、愛する者をみな叱ったり懲らしめたりする。」(19 節）と言って、彼らを「愛する者」と呼んでおられます。そして、「だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(20 節）と約束しておられるのです。聴こうとしないだけで主イエスはずっと私たちの心の扉をたたき続けておられるのです。「あなたの生活のどこに私はいるので

しょうか？」と。

２）神は呼びかけに答えるのを待っておられます。

　主イエスは、教会の外にいる人々に対しては、「わたしのところに来なさい。」と言われますが、すでにイエスを信じて教会の中にいる者たちには、「わたしを迎え入れなさい。」と、その心の戸を叩かれます。その戸を叩く音、ノックの音は、決して、「コツ、コツ」という小さいものではなく、イエスは両手に満身の力を込めて、教会の戸を、そして、教会を形作っているクリスチャンの心の戸を「ドーン、ドーン」と叩いておられることでしょう。その戸を叩く音こそ、御霊の声、聖霊の語りかけです。私たちは、御霊の招きを拒まないように注意しなければなりません。

旧約聖書の預言はみな、聖霊が預言者たちに語りかけたものでした（ペテロ第一 1:11）。新約時代の使徒たちも、御霊の語りかけを聞きました。伝道者ピリポがエチオピアからきた役人を乗せた馬車を見た時、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」とピリポに語りかけたのは、御霊でした（使徒 8:29）。使徒ペテロも、はじめて異邦人のところに行く時、「ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。」と言う御霊の声を聞いています（使徒 10:19-20）。世の終わりのことについて、使徒パウロは「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」（テモテ第一 4:1）と預言しています。使徒パウロが「御霊が言われる」と言ったように、御霊が語られるのでなければ、どんな預言（現代なら聖書の説き明かし）も虚しいのです。今朝の聖書、ヨハネの黙示録もまた預言の書物で、世の終わりのことを示していますが、この書物も、キリストの弟子ヨハネが「御霊に捕らえられ」（黙示録 1:10）て書いたものです。御霊は、決して寡黙なお方ではありません。常に、私たちに語りかけておられるお方です。七つの教会へのメッセージのどれもが、「耳のある者は御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」ということばでしめくくられています。

そしてヘブル人への手紙の著者は言っています。「ですから、聖霊が言われるとおりです。『今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。』」（ヘブル 3:7）ヘブル人への手紙が「聖霊が言われる」と書いていることに注意してください。「聖霊が言われる」というのには、「神が言われる」という以上の重みがあります。「聖霊が言われる」というのは、聖霊をいただいているクリスチャンに語り続けられているので、直接的で、無視できない招きをさしています。これは、神がそのお心のすべてを託されて語りかけておられる招きのことばです。

私は高校３年生を前にした春休みに、高校生キャンプで信仰を持ちました。半年ほど前から教会に生き始めましたが良いことを教えてもらっているというレベルで、信じるというところまで行きませんでした。そのキャンプの最後の夜にとてもシンプルなメッセージがありました。感動的な話でもなければ知的な好奇心が湧く話でもありません。しかし、どういうわけか話を聞いてゆく中で、過去に自分が犯した罪のことが次々に思い浮かび、自分自身はこれらの罪を気にしないでおくことはできないと思いました。大げさなようですがその時の心境は世界のどこにも逃げたり、避難する場所が無いという感覚でした。恐らくその時に聖霊が私の心をドーン、ドーンと叩いておられたように思っています。次に大きな聖霊の取り扱いを受けたのは自分が献身してゆく時のことです。将来、牧師、伝道師、あるいは宣教師として働くという決心はインドに行った時ですがその後も様々な聖霊の導きを覚えさせられました。会社を辞めて献身しているわけですから神様もそれを聞いてくださり分かりやすい道を備えてくださっていると思っていました。しかし現実はそう簡単には事はすすみませんでした。特に決断を迫られたのは３つあります。将来、どのような働きにつくか、将来の経済的見通しはどうなのか、そして結婚ということです。いろんなそれこそ、駆け引きとも思えるような祈りもしたことがあります。「神様、私はどちらかというと宣教師にはあまり向いていないように思います。しかし、もしどうしてもとおっしゃるならアフリカは遠いので外して欲しい」とか、急にアメリカ留学の道が開かれたものですから、「もう少し経済的にも余裕が出来

てからいけないものだろうか？」、特に一つとしてサポートしてくれる人や教会はなく、独立してやらなければならないので経済的な見通しが立ちませんでした。また結婚に関しては数年後、日本に帰ってきてからのことになる。これに関しては相手がいることですし、自分の決断だけで進むことはできません。そんなことで白紙の状態で結婚に関しては神様にお返しします。つまり諦めたのです。そして結果的には想定外の助けや導きによってすべてかなえられました。
これらもまた神様にすべてをおまかせするということで聖霊の取り扱いを受けました。

ラオディキアの教会の人たちのように豊かでこの世的な意味では充実している教会は自分たちで教会のことは出来るという思いに至りやすいと思います。きょうも聖霊はクリスチャン一人一人に問いかけておられます。「あなたの心の中で、私（主イエス）はどこにいるのですか？」